



この人を たずねて

国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
食品総合研究所 主任研究員

和田有史 氏

インタビュー
富田瑛智・栗延 孟



Profile—わだ ゆうじ

長寿科学振興財団リサーチレジデントなどを経て現職。日本官能評価学会常任理事、日本基礎心理学会理事なども務める。著書は『味わいの認知科学：舌の先から脳の向こうまで』（共編著、勁草書房）、『認知心理学ハンドブック』（分担執筆、有斐閣）、『商品開発のための心理学』（分担執筆、勁草書房）など。

■和田先生へのインタビュー

——「食」をテーマにした研究を始められたきっかけについてお聞かせください。

私は、院生時代は多感覚知覚をテーマにしていた、学位論文は時間知覚について書きました。その後、大学の助手になりました。当時、多感覚知覚にたくさんの研究者が取り組みはじめた時期でした。そこで、私は多感覚知覚の知見や方法などを用いて、何か新しい研究ができないかなあ、と考えていました。その頃、「食」に関する心理学分野には動物行動がバックグラウンドの方はいらしたのですが、感覚・知覚系の方は少なく、ニッチであるように思いました。

当時（2005年）の食総研（食品総合研究所）では、高齢者食についてのプロジェクトがあって、食品物性や、官能評価、脳機能など、バラエティに富んだ研究者が参画していました。「ここなら、何かおもしろいことができるかもしれない」と思い、ポストクとし

て食総研に入りました。

ですが、食総研に入る以前は「食」に関する研究は全然していませんでした（笑）。加えて、食総研には心理の研究者がいなかったもので、最初は何から手をつけたらいいかわかりませんでした。幸運だったのは、近所の大学と研究所に味嗅覚の心理学的研究のエキスパートがおり、私のポストがそういった方々に自由に相談にいかせてくれる寛大な方だったことです。それで、なんとか研究を進めることができました。

——「食」の研究をされていて、おもしろいと感じられるのは、どのようなところですか。

食総研に入る前の話ですが、大学では院生や学部生といろんなことをさせていただきました。また、形の記憶とか、SD法を用いた研究などもお手伝いしていました。そのときに、いろいろな方法で知覚や感性を測るおもしろさを感じていました。

このようなおもしろさは「食」の研究にも当てはまるのかと思います。「食」の心理には、さまざま

な要因が影響を与えていて、アウトプットも無限に考えられます。なので、実験要因の切り出し方のセンスが問われます。心理学的に意味があるファクターを抽出することはもちろんですが、他分野の食品関係の人たちがそれを見て、「おもしろい、役立ちそう」と思いそうなところを上手く切り出すこともそうです。そこが大変だと言えば大変だし、おもしろいところでもありますよね。

たとえばイチゴの傷の検査は、実際の現場では見た目で行っているそうです。その関係の論文にもノギスで計測された傷に見える部位の大きさが報告されていました。しかし、心理学者として、どういう視覚手がかりから人間がイチゴの傷を認識するかは特に問われていないのが不思議でした。そこで、食品の傷や鮮度の知覚の研究をはじめたのです。人間の知覚系が利用する食品の状態の知覚手がかりを探る、というアプローチは食品研究の中心的な分野である農学ではあまりなく、ある程度は注目していただいているようです。

——他に研究をする上で、気を付けていることや意識していることはありますか？

一般的な実験心理学では、他の条件は一切変えず、ある要因の程度だけを変えていって、その要因と知覚の関係を閾値のシフトなどから検討する、というような研究が多いです。このような厳密にコントロールされた刺激を用いた研究ももちろん素晴らしいと思うのですが、私は、たくさんの知覚的変数がある中で、ロバストな要因を検討することを心がけています。というのは、実際に食品を観察するのは、非常にノイジーな環境であり、そのような環境の中でも不変なファクターを抽出しない



と、日常的な人間の知覚を解明したことはないですし、他分野の食品関係の人たちに役立つ知見として認識してもらえないからです。

他には、実験を計画する上でコントロール群を工夫することは大事だと思っています。実験群はすぐに思いつきますが、コントロール群がおざなりな研究というのは、ぐずぐずになってしまいますから。実は実験群より、コントロール群のほうがその研究の良し悪しを決めると思います。コントロール群を考えるとときには、プレゼンをする場面をイメージしています。最終的に何を主張するのか、それには何と比較するのが妥当なのか、そこは常に心がけていますね。

——では、最後に、若手の研究者に向けて、何かメッセージをお願いします。

僕、自分が若手だと思っているのですが、もうみなさんから見て若手じゃないんですかね（笑）。心理学の人は、ヒトを対象にした実験計画などのスキルについて、いい訓練を受けているはずなので、そこは自信をもっていいと思います。ヒトの心理・行動の計測の仕方について、いろんなカードを持つことができれば、学際的な研究をするときにも便利だと思います。

心理学は、いろいろな方面からおもしろいと思ってもらえているので、企業に身をおいて研究するチャンスもあると思います。いわ

ゆるアカボスは減っているのですが、今後の学位取得者には大切な選択肢になるでしょう。その機会を得るには、いろいろな研究に目を向けてみるのが大事だと思います。心理学の中でも自分と違う分野の研究もたまにはみて、興味の幅を拡げておく。そうすれば、心理学者の仕事の幅も広がるんじゃないかなあ、と思っています。

■インタビューアの自己紹介

インタビューを終えて（栗延）

和田先生とのお話の中で、最も印象に残ったのは、先生が心理学分野も食品関係分野も意識しながら研究を進めていらっしゃるということです。私は自身が介護福祉士であることから、高齢者福祉に関わる心理学の研究を進めておりますが、施設職員の方、高齢者の方、また高齢者のご家族の方々にとっても役に立つような研究をしたいという心がけています。

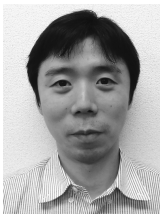
特に私は、福祉の現場に向かい、実験を行う機会が多いので、現場の人に理解してもらえるように計画を説明したり、結果を報告したりする必要があります。和田先生は他分野の人たちがそれを見て、「おもしろい、役立ちそう」と思いそうところを上手く切り出すことを意識されていたり、実際に食品を観察する環境から研究を計画しておられることなどをお話してくださいました。私も同じような考え方を持っていたため強く共感することができ、また現場の人を意識することはやはり重

要なことだということを再認識することができました。

インタビューを終えて（富田）

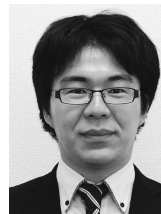
私は大学院生の時、実験心理学の研究室に所属し、心理学的に興味があると考えた研究を行ってきました。その後、ポスドクになり、フィールドに近い研究を行いながら、心理学分野以外の人々に役立つ研究というものを意識しはじめました。実験室外での研究経験がそれまでほとんどなかったため、統制できない要因の多さに悩みましたが、和田先生へのインタビューで「非常にノイズな環境の中でも不変なファクターを抽出することが他分野、世の中の人にとって役立つ知見になる」と伺い、これこそ今まさに意識しなければならぬことなんだと痛感いたしました。

また、現在、私は自動化した機器の学習に関心があるのですが、その関係もあり、心理学以外の分野の人々に接することが増えてきました。そうすると、どの分野の人々にどのような点を主張しなければならないのか考えながら実験計画を練ることも増えてきました。そうする中で、心理学分野にインパクトがあり、かつ、他分野にもインパクトがあるような研究を計画することの難しさと重要性を感じております。和田先生のお話は、今後の研究活動を行う上で大きな糧になったと感じております。



Profile—とみた あきとし

筑波大学システム情報学系助教授。2013年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員、筑波大学人間系研究員を経て現職。博士（人間科学）。専門は認知心理学。



Profile—くりのぶ たけし

東京都健康長寿医療センター研究員。2014年、首都大学東京大学院人文科学研究科博士後期課程修了。筑波大学人間系研究員を経て現職。修士（社会福祉学）、博士（心理学）。専門は認知心理学。